

断種論議は謝絶して、心的 Self 探究を一步でもすすめるべきだ、と主張する。「恩師」である三宅を「教主」とまでいいきっている。

ともかくも、一九四〇年の国民優生法には不良少年断種はもりこまれなかった。

菊地甚一（一八八七—一九五一）は、『脳』の編集にあたっていて、成田をささえた人である。山形県にうまれた菊地は済生学舎にまなんで一九一四年医師免許を取得。一九一五年と巢鴨病院医員。のち大塚に開業し、司法精神鑑定をよくしていた。精神鑑定を依頼された人の無実を証明したこともある。また日本犯罪学会の運営にあたり、司法精神鑑定に関する著書も数冊ある。かれは『脳』に、断種法に関する小論文をかいていて、それは『断種法問題小論』（一九三八年）にまとめられた。かれは強制断種につよく反対し、階級性をとりあげ、ナチスを批判している（論文にみずから×××を使用）。精神病は遺伝だけできまるものではない、精神病になつたらまず療病処置が考慮されるべきだ（治療学としての精神病学はまだわかい）、対象者をきめる手続きが問題だ、というのが、かれの断種法反対の主要点である。

（平成十五年一月例会）

江戸幕府寄合医師添田玄春の医学と医療活動

深瀬泰 旦

「添田玄春日記」

順天堂大学山崎文庫には「添田玄春日記」七冊が収蔵されている。嘉永元年（一八四八）から元治二年（一八六五）までの一六年にわたる添田家の日記であるが、現存するのはわずか八年にすぎない。これは添田家の執事の筆になる日記で玄春自身による記述ではないので、玄春の社会的言動や感想、心の動きはしるされていない。その反面玄春をはじめとして、雇人の細々として行動まで詳細に示されているという別の一面もあつて、添田家の客観的な状況を示るにはかえつて有利であるという利点もある。本例会では添田玄春の医学と医療活動について報告した。

玄春の出仕先

この日記から玄春の出仕先をみると、嘉永元年から安政五年までは多紀氏主宰の幕府「医学館」であり、安政六年には、お玉ヶ池「種痘所」となり、文久三年から慶応元年までは種痘所が改称された「医学所」である。

それぞれの年においてもつとも注目すべき出来事をあげると、嘉永元年に玄春は二三歳で父の死後家督をついで小普請医師となり、医学館に出仕した。嘉永三年には医学館薬品会

鑑定手伝を仰せつけられ、薬品会の運営の一翼を担った。この年から嘉永五年にいたるまで、「野間氏会」という現今でいう研究会や輪読会のような勉強会に出席している。

嘉永五年には小普請医師から寄合医師に昇格した。安政五年——この年玄春は三三歳である——のお玉ヶ池種痘所の発起にあたっては、その建設資金を拠出した八三名の一人として加わっているが、この日記は上半期の記事をかいているので残念ながらその記述はみえない。この年は一三代將軍家定が死去したので、そのお代替りの諸行事が翌六年六月まで延々とつづいている。

安政六年には小塚原においておこなわれた腑分けの見学に出かけている。これまでその日を確定することができなかつた村田蔵六による腑分けであり、これが六月一〇日であることがこの日記によって明らかになった。

文久三年に玄春は長崎に留学するが、これについては一年の第一〇二回総会(仙台)ですでに報告した。

医師たちとの学問的交流

医師たちとの交流は、蘭方医としては緒方洪庵や伊東玄朴をはじめ、大槻俊斎、手塚良庵(良仙光亨)、島村鼎甫、池田多仲など、本草家の小野蕙叟、玄庵父子、漢方家としては多紀元堅や元听、野間成式や成紀、また元康氏などの名がみえる。祖父道周が長崎に留学してオランダ語に通暁していたという血筋をうけているとはいえず、医学館に勤務していた事実

を考えると、添田氏の医学は蘭方というより漢蘭折衷派というのがあつたのではないかと思つている。

島村鼎甫からは蘭書の講読をうけている一方、島村の紹介状を持参した学生に玄春が蘭書の講読をさずけている。緒方洪庵とは医学所頭取役宅の新築問題をめぐつてすくなくならぬ交渉があつたが、これについては四月におこなわれる第一〇四回総会(福岡)において報告する予定である。

医療との関わり——宅診と往診

医療活動としては自宅での宅診や往診がおこなわれているが、表向きは寄合医師というれつきとした幕府医官なので、これはあくまでもサイド・ビジネスである。そこで自邸である蟻動館は、町医のように表と奥とが峻別されていたわけではなく、自宅での診療は「奥へ通し世話致遣ス」という状況であつた。

往診は堀石見守の屋敷に出向いたこともあり、木場の材木問屋へでかけるなど大名から町屋にいたるまであらゆる階層におよんでいることがわかる。安政五年と文久三年のコレラの流行にさいしておびただしい数のともらいが行き来したとの生々しい記事がみられるが、それによつて診療が多忙をきわめたというわけでもなかつたようである。

(平成十五年三月例会)